

威や軍国主義の台頭に対して、ガンディーは日本への懐疑的な立場を変えず、藤井も日本の立場への理解を求める姿勢を変えなかった。②藤井らの仏教僧としての日常的な宗教的実践をガンディーは評価し、藤井や弟子たちとの親密な交流を、むしろ楽しんでる様子が見られた。③結果として、思想的な立場の違いにも関わらず、両者の深い交流は継続され、それは弟子たちにも受け継がれた。

すなわちガンディーは、藤井や弟子たちの日常的な宗教者としてのあり方に深い共感を示したが、それによって自らの対日認識を変更することはなかった。また、ガンディーとの親密な交流を通して日本山妙法寺は、戦後の平和運動への展開に際して、ガンディーの非暴力運動を、改めて継承することを可能にしたことが論じられた。

渡辺海旭をめぐる

社会事業と仏教の関係性について

菊池 結

日本における「仏教と福祉」に関する研究は、明治後期から大正にかけてを黎明期とみなすことができる。明治維新による社会体制の変化や廃仏毀釈、欧米からの近代社会事業の思想や方法の導入、キリスト教徒による社会活動からの影響、産業革命による社会問題の多発を要因として、仏教者たちが社会的な

活動を始めたことは、よく知られている。その後、第二次世界大戦末期および戦後の空白期をえて、仏教福祉研究は、昭和四一年に設立した「日本仏教社会福祉学会」において再び活発となる。そして、さまざまな議論をえて、二〇〇五年に『日本仏教社会福祉辞典』が刊行された。

発表者は、これまで明治期の仏教者が自らの仏教思想を近代的な社会事業にどのように関係性をもたせて仏教社会事業を論じているのかに感心を持ち、渡辺海旭をめぐる社会事業と仏教との関係性について考察してきた。しかし、発表者をたびたび混乱させたのは、社会的な実践を行う仏教者にとって、仏教思想がその実践にどのように関係しているのか見えにくいという点である。いわば理論と実践の不一致ともいえる現象が見られる。

海旭の社会事業と仏教の関係性は、古来より変化することのない大乘仏教の精神と、時代の進歩にともなうて変化すべき「科学的な」社会事業という、精神と実践方法を異なるものとして区別した点に近代的な特徴がある。同様に、仏教社会福祉辞典編纂委員長であった中垣昌美氏は、仏教社会福祉論は、「科学」としての、すなわち社会科学の一部門としての社会福祉学の一分科に据えた仏教社会福祉学にあることを提唱する。その場合、「仏教」は「厳密には仏教者または教団」を表すか、主體的契機として「仏教社会福祉の実践活動における仏教精神の発露」として表される。本発表では、社会科学的な認識にもとづく実践方法を基礎とする仏教社会福祉論の提唱と、その精神または主體的契機としての「仏教」の強調の妥当性について

第10部会

考察する。

では、社会科学にもとづいた仏教社会福祉において、仏教と社会福祉との関係性はどのように扱われるのだろうか。中垣氏は、仏教と社会福祉の結合様式は、具体的に実践的な活動体としての仏教教団を媒介とする限りにおいて、歴史的・社会的現実のもとで結び付けられるとする。また、「仏教的価値志向性（仏教精神）」は、（中垣氏が述べるような）仏教社会福祉研究に関する理論的枠組みを根底に据えて、社会的問題への対応に積極的に取り組み、問題解決の実践過程の上に、主体的契機として導入・活用していくべきであることを述べている。

しかし、仏教教義を主体的契機とした場合に、主体者を即社会的な活動に結びつかせたり、また人間関係において近代的な意味での平等観を生じさせるのかどうかは、さらに検討が必要に思われる。しかし、この点を理論化しなければ仏教社会福祉の存在の意義が問われることになりかねないだろう。同時に、仏教思想を抜きで仏教社会福祉論を構築することは、やはりその独自性と役割を指し示すことができないだろう。

最後に、社会科学を強調した仏教社会福祉論においては、以下の課題が生じることを指摘して終わりたい。

一、社会科学を強調する仏教社会福祉論では、仏教教義との無関係さが社会科学の強調と相対的に現れる。

二、その結果、社会福祉思想に合致したかたちで、随意的に仏教思想が選択され結合される可能性、あるいはまったく仏教教義と無関係に成り立つ場合もありうる。

仏教思想に基づくケア論の展開

坂井祐円

近代社会は、独立した個人が、権利や義務に関わる社会的規範に反しない限りで、それぞれの自由意思や判断能力に従って生きる、という個人主義的自由主義をもたらしたが、ケア論はその反動から起こってきたものである。すなわち、人間とは、そもそも共同性のもとに生まれ育ち、他者への配慮や同情・共感に由来する行動規範のもとで、他者との感情的なつながりを求める存在である。人と人が相互に支え合い、共に生きる世界を理想とする関係主義的共生主義が、ケア論の基調には流れている。

ケア論が前提とする無自覚な信念は、素朴な人間肯定・人間信頼にあると言えよう。仏教思想が現代のケア論に寄与できる面があるとすれば、この素朴な人間観に対して反省を促すとともに、「ケアする主体はいかにあるべきか」についての一つの問題提起を投げかけることではないかと思う。それはまた、近代社会が生み出した理性中心の人間観とも異なる、智慧と慈悲に基づく人間観の提示である。

そこで問題としたのは、ケア論の焦点の一つである「ケアへの欲求」についてである。多くのケア論に散見されるのは、「ケアへの欲求」は人間にとって本質的で自然な善なる感情である、という主張である。赤子が泣いていた、人が困って途